

『土方久功日記』から見た中島敦「マリヤン」の実像

清水久夫

はじめに

『土方久功日記』に見えるマリヤ

中島敦の「マリヤン」^①は、パラオ人女性を描いた短編小説である。この短編小説が実在した人物マリヤがモデルであることは知られていたが、その実像については不明なことが多かった。それを明らかにしたのは、河路由佳氏の『中島敦「マリヤン」とモデルのマリア・ギボン」^②である。河路氏は、現地パラオでの関係者へのインタビューを行い、国内では、三育学院大学の関係者の協力ですDA関係の資料調査を行った。それにより、その実像はかなり明らかになった。

一方、『土方久功日記』^③（以下、『日記』と略す）には、マリヤの名前が頻出する。したがって、『日記』は同時代の資料として価値を持つものと考えられる。小稿では、『日記』に見えるマリヤの記事に基づき、マリヤの実像について述べたい。

なお、土方久功については、拙著『土方久功正伝』^④を参照されたい。

昭和14（1939）年は、久功にとつて、慌ただしい年であった。その年1月、7年余滞在した孤島サタウル島を去り、パラオへ戻った。3月、南洋庁内務部地方課の嘱託となり、4月、杉浦佐助と共に、玉枝（父が日本人、母がパラオ人の少女）を伴い一時帰国し、東京で「南洋彫刻家・杉浦佐助 作品展覧会」と「土方久功氏蒐集南洋土俗品展」の二つの展覧会を開いた。そして、8月、一人パラオへ戻った。

マリヤの名前が『日記』に初めて見えるのは、その直後の9月8日である。その後、マリヤの名前は『日記』にしばしば見え、昭和17（1942）年3月に土方久功が帰国するまで、継続して見える。久功が帰国した後は、マリヤの名前は書信の形で『日記』に見える。『日記』のなかでマリヤの名前が見える所を、末尾に一覧にした。

①は、「日記」にマリヤンの名が初めて見える所である。久功は、新聞に記事が掲載された土地の借地権利金の問題を調べるため村へ行った。途中道でマリヤに逢い、そのままマリヤの所へ行き、恐らく土地問題の話を聞いたのだろう。この土地問題のひとつは、マリヤの所有地であるスペイン教会の下、道路を隔てた小宅地をめぐる一件である。以前、日本人に貸し証書を作ったが、証書の年数が切れていないのに、既に三人の者が、一枚の証書を譲り渡して、変わってしまった、というものである。ここから、マリヤがコントロールに土地を所有していることが分かる。恐らく、他にも所有地があったであろう。マリヤは土地を所有する階層に属していたのが分かる。

②では、久功は、久功の所へ行く途中のマリヤに逢って、自分の官舎へ連れてきた。そこへ、栗山、小林、三瓶等日本人の知人が何人も集って来て賑わった。^⑭、^⑮では、1941年1月20日の夜、久功は南洋生物研究所の研究員、和田清治の部屋を訪れたら、マリヤも来た。翌日も、夕方、和田を訪れたら、マリヤも来た。マリヤは久功だけでなく、他の日本人とも親しくしていたことが推測される。小説「マリヤン」に書かれている、「そういえば、マリヤンの友達は、日本人ばかりのようだ。」というのを裏付けているようである。

⑤では、久功が地方課長と飯田が東京に出張し、松野が休暇で日本へ帰るので、三人を見送りに波止場へ行ったら、やはり、松野を見送りに来たマリヤと逢う。そのあと、久功はマリヤと共にパラオ

本島（バベルダオップ島）のガツキップ村へ行き、赤ん坊が生まれたお祝いの儀式に加わる。このような島民の儀式に日本人である久功が参加し調査できたのも、マリヤが同行していたからであろう。

⑧以下では、マリヤはしばしば久功の官舎を訪れ、また、久功はマリヤの所を訪れているのが見られる。その目的は、パラオ語を学ぶため（^⑰、^⑳、^㉑）と、パラオの歌を調べるため（^㉒、^㉓、^㉔、^㉕）であった。久功は、それ以前から、パラオの歌を調べていた。

この年2月20日、久功はマリヤの姉キサウルの所で、パラオの古い歌に日本語の訳をつけた。翌日は、キサウルの所で助役の老人をつかまえて、古い歌を書いた。22日には、午頃キサウルが呼びに来てくれ、夕方まで古い歌をやっている。23日は、朝キサウルの所で歌を調べているのが、「日記」に見える。久功は、当初、姉のキサウルからパラオの古い歌を教えて貰っていたが、9月から、マリヤに替わったのである。

「マリヤン」には、H氏は作者に、「僕のパラオ語の先生」とマリヤを紹介し、パラオ地方の古譚詩の類を集めて、邦訳するのを手伝うため、週に三日来ている、と書かれている。「日記」の記述とはほぼ同じとみてよからう。

その成果は、没後、「パラオ語の発音と写音に就いて」^⑥、および「パラオの歌謡」として刊行されている。

⑭では、武官から飛行協会の人達が島民の腰蓑姿を撮影するのを頼まれた久功は、朝からマリヤ等の所へ行き、あちらこちら探した末、デイラレイハル等三人を得て撮影した。久功は島民に顔が利く

ので、このようなことを頼まれるが、結局マリヤに頼むことになった。

久功は、しばしば調査旅行へ行ったが、①では、この年10月25日から30日までパラオ本島（バベルダオツブ島）へ出張する際、マリヤに紹介状を書いてくれるよう頼んでいる。恐らく、村の有力者への紹介状であろう。村々では、島民の家に泊り、食事の用意もして貰っている。マリヤの紹介状が有効であったことを示すものである。

ついで、②をみよう。マリヤが帰った後、マリヤがタバコの箱に書いた、いたずら書きを見付けた。久功はたいへん感心し、それを『日記』に書き写している。以下、引用する。

夜、Maria来ル。

Maria ガカヘツタ後、私ノ苧ノ箱ニイタツラ書キガ残ツテ居ル。

何処デオボエタカ、

よはき者よ、汝の名は女なり

されどつよき者よ、汝の名は母なり

ト。ソレカラ、

なげくなマリヤよ

汝の名は女なり

されどつよく生きよ

運命にまけずに

ト。ソシテ、

悲しむなメリー

なくなロリー

ダッテ。

一行目、「よはき者よ、汝の名は女なり」は、シエークスピアの『ハムレット』の中の有名な台詞である。二行目、「されどつよき者よ、汝の名は母なり」は、ヴェクトル・ユーゴーの名言、「女は弱し、されど母は強し」が基になっているのだろう。それ以下は、当時のマリヤの置かれた状況を「詩」で表している。このような「詩」を書けるのも、マリヤに相当な教養があったからとみてよからう。

ここから思い起こされるのは、「マリヤン」の、次の部分である。「或る時日氏と二人で道を通り掛かりに、一寸マリヤンの家に寄ったことがある。」マリヤンの家には、厨川白村の「英詩選釈」と岩波文庫の「ロテイの結婚」の二冊の本が小さなテーブルの上に載っていた。そして作者は、「恐らく、マリヤンは、内地人をも含めてコロール第一の読書家かも知れない。」と述べる。

この記述は、マリヤの実際の姿を表していると見てよからう。さらに注目したいのは、久功が「パラオ島民部落組織」、「ヤップ離島・サテワヌ島の神と神事」、「サテワヌ島に於ける子の養育と性的秩序」の3つの論文の抜き刷りをマリヤに進呈していることである(85)。島民の中で抜き刷りを進呈されているのは、マリヤただ一人である。これは、久功がマリヤの知性、教養を高く評価し、敬

意をもっているからであろう。

久功は、マリヤに「島民料理」を作ってもらっている(13)、(78)。この2例は、共に何か、特別の時である。

(13)では、久功は慶応大学の学生に島民料理を食べさせる約束をしていたので、翌々日の夕方、島民料理を用意してもらおうようマリヤに頼んだ。鶏の丸蒸しと魚の燻製、パンの実際の焼いたのと、餅、タロイモ、パイナップル、バナナ、パイイヤと、かなり豪華である。しかし、この時学生達はアンガウル島に行ってしまうて留守だったので、飯田、菅等、知人等と料理を食べることとなった(『日記』8月23日)。

(78)では、阿刀田が間もなく内地へ帰ると、松井の懇請があつて、熱帯生物研究所の研究員、パラオ放送局員が久功の官舎に集まり、饗宴を催した。マリヤとギロイが御馳走を持ってきて、隣りの部屋で調理した。料理は、鶏の丸蒸し、大きな魚の燻製、タロイモなどであつた。この饗宴には、中島敦も加わっている。その翌日、久功等は、マリヤの所へ礼を持って行った(79)。

「マリヤン」には、マリヤンが時々H氏の所へ、うちからパラオ料理を作つて来ては御馳走する。その都度、作者はお相伴に預かる、と書かれている。

(81)では、1941年12月29日、マリヤとギロイが、久功の所へ島民料理を持ってきて、そこへ敦も訪れている。(86)では、敦が久功の部屋にいる時、マリヤがタロイモとブドウ酒を持って来た。このように、特別な時以外にも、マリヤがパラオ料理を持って来ることも

あつたのである。「マリヤン」に書かれている通りであろう。

中島敦の「マリヤン」には、「私が初めてマリヤンを見たのは、土俗学者H氏の部屋に於てであつた。」とある。(48)の8月18日がその日であろう。『日記』には、「夜、中島君(敦)来ル。M.E.H.来ル。」とあっさり記されている。その後二人は、(73)、(81)、(86)にあるように何回も久功の部屋で会っている。

(84)では、マリヤが留守に久功の官舎に来て、ズボンを置いて行った。マリヤは、日本人から裁縫を習ったことがあるので、久功のズボンを縫つてあげたのであろう。恐らく、頼まれて、洋服を縫うこともあつたのではなからうか。

(88)、久功と中島敦は、帰国を前にして、2月25日の夜、マリヤを訪ねた。『日記』には、「九時前二帰ッテクル」とあるので、恐らく姉のキサウルも交え夕食を共にした事であろう。「マリヤン」には、「此の春、偶然にもH氏と私が揃つて、一時内地へ出掛けることになつた時、マリヤンは鶏をつぶして最後のパラオ料理の御馳走をして呉れた。」と書かれている。この晩のことを書いているのだろう。

「マリヤン」には、「我々が内地へ帰つてから、H氏の所へ二三回マリヤンから便りがあつたそうである。其の都度トンちゃん(中島敦)の消息を聞いて来ているという。」と書かれている。『日記』によれば、久功の帰国後は、マリヤと久功の間で文通があつた。帰国して間もない昭和17年(1942)4月1日には、久功はマリヤから手紙を受け取り(89)、その翌々日3日に、マリヤに返事を書いている(90)。2月半後の6月15日にも、マリヤから手紙を受け取っている。その

手紙には、バラオの近況が書かれていたのであろう。そしてその日のうちに、久功は返事を書いている(91)。「日記」には、その手紙が書き写されているので、引用する。

マリヤ!

ホント二日ガタツノガ早イ。ヤット暖カクナツタと思ツタラ、一昨日カラ雨ガ降り出シテ、降ツタリ止ンダリ、風ガ吹イテガタガタト硝子戸ガ鳴リ、入梅ニナツテシマツタラシイ。イヤナコトダ。

今朝マリヤカラト武官カラト手紙ガ来タ。船ガ来タラシイ。チットモワカラナイ。

バラオハドンナカシラ。高瀬貝ガハジマツタ由。毎年、一度連レテ行ツテホシイト思ヒ思ヒ、トウトウ今ダニ行カナイデシマツタ岩山ノ生活。羨マシイコトダ。

先月二十日ニトウトウオナカラ切ツテ、ヤットコノ一週間バカリ前カラ、マタ電車ニ乗ツテ出歩クコトガ出来ルヤウニナツタ。

木々ハ花ガナクナツテ、葉バカリノ緑ガ濃クナツタケレド、郊外ノ家々ノ庭、庭ニハ赤イ、白イ、黄色イ花、花、バラノ花、百合ノ花、グラヂオラス、アマリリス、アヂサキ、早咲キノ小菊ノ群、マダ、マダ、マダ、イクラデモ咲イテル。

手紙には、バラオを懐かしむ気持と、マリヤに対する親愛の情が溢れている。

次にマリヤへ書信を送ったのは、中島敦の没後、昭和19年(1944)5月20日、ボルネオから帰国し、入院していた大阪の赤十字病院を退院し、東京へ戻って来て間もないときであった。その時久功は29通の挨拶状を出したが、この葉書はその中の一通であろう(92)。

そして、1967年12月25日、久功は20余年ぶりに、マリヤから便りを受け取る。「日記」に文面が書き写されているので(93)、以下、引用する。

マリヤカラノ便リハ、多分20年ブリクライカ。クリスマス・カードノ半面ニ便リヲ書イテキテイル。イツカ毎日グラフノカメラマン渡辺正吉君ガ行ツタ時、紹介シテヤリ、思イ出シタヨオニネックレースヲ持タセテヤツテオイタノダツタ。

夏、タマエガ出テ来タ時、マリヤガ結婚シタトキイテイタガ、Maria GibbonガMaria Merepニナツテイタ。半面ニ新年オメデトウゴザイマス、トアリ、半面ニワ、次ノヨオニ書カレテイル。12月20日1967。

「土方センセイ。

おかはりありませんか? とつぜんでおどろくでせう。私、マリヤです。御ブサタしました。一年前、バラオに来られたシンブン社ノ方に、先生御元氣の事きいて嬉しく思いました。知りビトの近況を知るのはいれしいことです。おみやげのネックレースありがたふでした。今日までおれいも言はず、ほんとに心から失礼

をおわびします。実を言ふと、日本語、日本文字をすっかり忘れ
ました。二十年以上もぜんぜん話す日本人も居らず、本も読まず
では忘れます。ムリしてコトバを考へ考へてこれまで書いて来ま
した。私は元氣です。としをとってバアサンです。早いものです。
此の頃は Ngerel Belau (voice of Palau ラジオ) がしきりにクリ
スマス ソングをうたうので、今年も又 暮れてしまふのかと
オドロキます。オクさまにドウゾよろしく、そしてよい年をおむ
かへください。いのつています。ではこれでサヨナラします。又
たよりします。くれぐれもお大事に。

マリヤ・メレップ

ヨク、コレダケ日本字ヲオボエテイタモノダト思ウ。少女時代
ニ日本ニ来テ、タシカ女学校ノ3年グライマテイタヨオニ聞イテ
イルガ。

マリヤの手紙は、ややとどどしいところがあるものの、意味の
通る日本語で書かれている。文中にある「タマエ」は、昭和14年(1
939)4月、杉浦佐助と日本へ一時帰国した時同行した「玉枝」
である。玉枝は久功がパラオへ戻った後も日本に残り、久功の妹・
英子の婚家から洋裁を習いに通っていた。また手紙には、「又た
よりします」と書かれているが、その後、久功がマリヤからの手紙
を受け取った様子はない。その翌日26日、久功はマリヤへ手紙を書
き送った(94)。マリヤへの最後の便りであったが、その文面は分
からない。

その4年後の1971年5月、マリヤは亡くなった。
岡谷公二氏の著書に、「久功の夫人宅には、マリヤンの手紙が数
通残っている。」と記されているので、著書が書かれた1990年
当時は、マリヤの手紙が存在していたのである。

むすび

小稿では、『日記』により、具体的なマリヤの実像を知ることが
できた。

マリヤはコロールに土地を所有していた。マリヤには、日本人の
知人が多くいた。マリヤは久功の民族学調査に協力していた。久功
はマリヤからパラオ語とパラオの古譚詩を教えてもらっていた。マ
リヤが相当な教養を持っていて、それを久功が高く評価していた。
マリヤが時々久功のところへ、島民料理を作って持って来て、敦が
お相伴に預かることがあった。マリヤはかなり日本語ができた。マ
リヤは洋裁ができたこと等である。

岡谷氏も述べているように「マリヤン」には、殆ど虚構はないよ
うに見える。しかし、疑問が残る。どうして、久功が最後に書いた
回想文「パラオでのトンちゃん」の中で、『マリヤン』に出てくる
H氏を私のことだと言う人があるが、そんなふうに見える人があ
る、是非トンにたしかめてもらいたい」と書いたのか。河路氏は、
「H氏がマリヤをからかう場面など実際には別の人物の言動がH氏
のものとして描かれているからではないかと推察する。」と述べて

いる。

この推察は、納得できるものである。「マリヤン」の終わり近く、大晦日の晩、作者と日氏とマリヤンの3人でコロール波止場へ行ったときの場面に、次のように書かれている。

「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ。」

なんだ。此奴、やっぱり先刻からずっと、自分の将来の再婚のことを考えていたのかと急に私は可笑しくなって、大きな声で笑い出した。そうして、尚も笑いながら「やっぱり内地の男は、どうなんだい？ え？」と聞いた。

ここでは、マリヤをただ一人の女として扱っているようで、悪意はないものの、久功の気に障るものだろう。しかも、この日の『日記』によれば、阿刀田研二と高松一雄も同行していた。河路氏が述べているように、別の人物、つまり阿刀田か高松の発言であろう。

『日記』からは、久功のマリヤに対する敬意が感じられる。とくに、論文の抜き刷りを進呈したことから分かるように、マリヤの知性、教養を高く評価している。中島敦の「マリヤン」に見られる、からかい、とも感じられるところに、久功は少し、ヘソを曲げたのである。

作者が初めてマリヤと会ったときの中島敦は「マリヤン」の中で次のように書いている。

私が初めてマリヤンを見たのは、土俗学者日氏の部屋に於てであつた。(中略)若い女の声が「入つてもいい？」と聞いた。オヤ、この土俗学者先生、中々油断がならないな、と驚いている中に、扉をあけてはいつてきたのが、内地人ではなく、堂々たる体躯の島民女だったので、もう一度私は驚いた。

この記述も久功には、愉快な感じを与えないであろう。このようなことから、最後の回想文に、「マリヤン」のなかの日氏は自分ではない、と言つたのではなからうか。

註

- (1) 死去半月前の昭和17(1942)年11月に刊行された第2創作集『南島譚』(今日の問題社)に「幸福」「夫婦」などと共に収められている。
- (2) 港の人、2014年
- (3) 国立民族学博物館蔵。1939年1月27日から1942年11月30日までが、須藤健一氏・清水久夫編で、国立民族学博物館から、『土方久功日記』第V巻として、2014年に刊行されている。
- (4) 東宣出版、2016年
- (5) 拙稿「1930年代コロール(パラオ)における「土地問題」」(『跡見学園女子大学文学部紀要』第53号、2018年)
- (6) 『土方久功著作集』第3巻(三一書房、1993年)、236頁
- (7) 同右、第2巻(1991年)、265頁
- (8) 岡谷公二氏『南海漂泊』(河出書房新社、1990年)、174頁
- (9) 同右、176頁

(10) 同右、175頁

(11) 筑摩書房版『現代日本文学体系』第35卷月報、1964年

(12) 「パラオの日本語人・マリヤとS D A教会、そして土方久功」(『言葉と文字』4号、2015年)、197頁

『土方久功日記』に見えるマリヤ一覧

1939年

9月

① 8日(須藤健一・清水久夫編『土方久功日記』V、100頁。以下、頁数のみ記す)

10月

② 15日(126頁)

③ 16日(126・127頁)

1940年

1月

④ 7日(163頁)

⑤ 28日(177・178頁)

2月

⑥ 17日(186頁)

4月

⑦ 11日(199頁)

⑧ 12日(199頁)

5月

⑨ 3日(205頁)

⑩ 15日(207頁)

⑪ 20日(208頁)

7月

⑫ 8日(221頁)

8月

⑬ 21日(234頁)

9月

⑭ 17日(240頁)

⑮ 30日(243頁)

10月

⑯ 3日(243頁)

⑰ 14日(244頁)

11月

⑱ 5日(256頁)

⑲ 12日(257・258頁)

12月

⑳ 27日(260頁)

㉑ 4日(261頁)

㉒ 10日(261頁)

㉓ 17日(266頁)

1941年

1月

㉔ 20日(276頁)

㉕ 21日(279頁)

6月

㉖ 3日(354頁)

㉗ 4日(355頁)

⑤1	⑤0	④9	④8	④7	④6	④5	④4	④3	④2	8月	④1	④0	③9	③8	③7	③6	③5	③4	③3	7月	③2	③1	③0	②9	②8
21日	20日	19日	18日	11日	9日	7日	6日	5日	1日		31日	29日	28日	24日	22日	17日	14日	7日	1日		30日	23日	19日	17日	5日
(374頁)	(374頁)	(374頁)	(374頁)	(372頁)	(372頁)	(372頁)	(371頁)	(371頁)	(370頁)		(370頁)	(370頁)	(370頁)	(369頁)	(368頁)	(367頁)	(366頁)	(365頁)	(363頁)		(362頁)	(360頁)	(359頁)	(359頁)	(355頁)

⑦4	⑦3	11月	⑦2	⑦1	⑦0	⑥9	⑥8	⑥7	⑥6	⑥5	⑥4	⑥3	⑥2	10月	⑥1	⑥0	⑤9	⑤8	⑤7	⑤6	⑤5	9月	⑤4	⑤3	⑤2
15日	13日		25日	23日	21日	20日	17日	16日	9日	7日	6日	3日	2日		30日	29日	25日	22日	19日	11日	8日		28日	25日	22日
(402頁)	(401頁)		(391頁)	(390頁)	(389頁)	(389頁)	(388頁)	(388頁)	(387頁)	(386頁)	(386頁)	(385頁)	(385頁)		(385頁)	(384頁)	(383頁)	(383頁)	(382頁)	(378頁)	(377頁)		(376頁)	(375頁)	(374頁)

